

## 細胞の情動、社会の知覚

Cellular Affect, Societal Cognition

### ドミニク・チェン

Dominick Chen

人の意識が数十兆個の自律性に支えられてようやく創発しているものだと考えれば、人間社会が知と呼ぶに値する集合的な自律的力学を形成するに至る条件が、一個人が体感しうる理念の量を遥か凌駕するとして何ら不思議はないだろう。だからといって、私たちが一個人の範疇を超えた領域について思考し、行動することを制止する理由は何もない。

フランシスコ・ヴァレラとウンベルト・マトゥラーナによって神経生理学の領域から提唱され、ニクラス・ルーマンによって社会学に移植されたオートポイエーシスという概念は、現在のところいまだ定義があやふやなままの生命現象の核心に迫るツールとして有効であり続けている。マトゥラーナによれば[1]、オートポイエーシスがそれまでのルートヴィヒ・フォン・ベルタランフィによって打ち立てられたシステム論と一線を画するのは、それが生命を外界に対して開放された存在としてのみではなく、内部の力学系においては閉鎖しているとした点にある。ここに生命体の自律性の議論が可能になった。後にヴァレラは、自律性という集合に含まれるオートポイエーシスの上位概念として、作動的閉鎖系 (operational closure) を説き、細胞レベルよりも抽象度の高い領域における自律性の構造化を図った[2]。

ヴァレラはその最晩年において、弟子のエヴァントンプソンらとともに、作動的という言葉や「enactive」という言葉に置き換え、身体性の動的な構成論に基づいた認知心理学の樹立に邁進した。この論がそれまでの西洋史的な個人主義 (individualism) と大きく異なるのは、同一性の成立を「在る性」(to be) から「成る性」(being) へ明確にシフトさせた点にある。この点について、ジャン・ピアジェに端を発する構成主義は個体間の「対

話」の作動性に注目し、ジェームズ・J・ギブソンによって開かれた生態心理学は個体と「環境」との相互作用に重点を置いたが、ヴァレラらは飽くまで、オートポイエーシスに始まる、同一性の最小構成素のレベルから、言い換えれば最も粒度の細かい次元から、同一性がどのように成立 (enact) されるのかという議論を展開している[3]。このことは安易な相互作用論や接続論を廃し、厳密にひとつの個体が成立するうえで必要な複数性と複雑性を見据える、いわばボトムアップからの視座である。

個体の複数性。これはエルヴィン・シュレディンガーが平方根の法則[4]として示唆した、作動が発生し持続するための分子の量的条件を想起させられると同時に、ジル・ドゥルーズの論考とも本質的なレベルにおいて呼応していることに注目しよう。ドゥルーズは成ること (devenir) とその力能 (puissance) について執拗に語り、同一性の出現の在り方を「機械」(machine) や「工場」(usine) と形容し、アンリ・ベルグソンから継承した情動 (affect) の議論を自らの脱領土化 (déterritorialisation) の概念と関連づけた。すべての現象は流れとしてあり、それらプロセスの持続 (ここにベルグソンの意味も重畳されるだろう) と消滅の反復のなかに、個体の力能の発現としての芸術の作動を認めた。

渡邊淳司がアントニオ・R・ダマシオに依拠しながら示唆するように、情動過程が包囲環境の知覚と並行して作動し、身体存在を成立させているとすれば、それはドゥルーズ的な意味での領土化問題と同義のことを指している。そして、心の理論やミラーニューロン論、エージェンシー認知といった他者との相互作用の形式もまた、情動過程の一部として理解することが容易になるだろう。あらゆるコミュニケーションは (自己同一性を成立させる) 身体性の拡張の振幅のなかで行なわれる、ということである。それは身体性のフレームの外に知性はけっして発生しないこと、そしてコミュニケーションはつねに身体感覚の相同から出発する、という設計の存在を示している。

こうした論を踏まえたうえでゲオルクトレメル<sup>ホモロジー</sup>の主張を読むとき、情報技